戊辰150年記念シンポジウム in 仙台 ～魂を継ぎ、未来へ～

みやぎ会津会創立10周年記念　福島民報社、東奥日報社共同企画

会津地方出身者らでつくる、みやぎ会津会の創立十周年を記念した「戊辰百五十年記念シンポジウムin仙台～魂を継ぎ、未来へ～」は一月二十七日に仙台市の仙台国際ホテルで開かれた。会津藩などによる東軍（旧幕府軍）と西軍（新政府軍）が戦火を交えた戊辰戦争の開戦から百五十年という節目に、会津藩が置かれた会津若松市、敗戦により藩士が移り住んだ青森県の斗南（となみ）藩の関係者が、郷土の先人が抱いた思いや戊辰戦争の教訓をいかに未来に語り継ぐかを語り合った。さらなる交流促進も誓った。

会津の心 150年超え 伝えゆく

斗南藩 過酷な環境に苦しむ 高い教育水準 地元に貢献

戊辰戦争で敗れた会津藩は、一八六九（明治二）年に斗南藩として再興を目指した。

斗南藩の誕生から現在に至る経緯は【略年譜】の通り。

斗南藩は現在の青森県の東部、岩手県二戸市の一部に分かれており、石高は三万石。併せて北海道南部の一部の支配も命じられた。会津から移住した藩士と、その家族は約二千六百戸、一万七千三百人余だったといわれている。

移り住んだ先で当たった開墾作業の途上で多くの人が餓死や凍死する過酷な環境の下で苦労を重ねた。藩士が受けた高い教育水準は現地でも受け継がれ「斗南日新館」の開設など、地元の教育振興に大きく貢献したとされている。

斗南藩関連の略年譜

1868(明治元)年9月	鶴ケ城開城
1869(明治2)年5月	家老萱野権兵衛が戦争責任を一身に受けて切腹
同12月	松平容保の子、容大(生後5カ月)を藩主として斗南藩誕生(3万石)
1870(明治3)年春	斗南の地への移転が始まる
同8月	斗南日新館を田名部横迎町の大黒屋立花文左衛門宅に定める。その後、円通寺に移す
1871(明治4)年2月	容大、藩庁の移転により五戸から田名部へ
同7月	廃藩置県。斗南藩の廃藩
1876(明治9)年10月	イギリス人が起工した東北最古の洋式灯台「尻屋崎灯台」が青森県東通村に竣工点火
1900(明治33)年8月	戊辰戦争33回忌の大法要にあわせて田名部円通寺境内に相携会(斗南會津会の前身)が中心となり「招魂之碑」を建立
1936(昭和11)年10月	秩父宮両殿下が下北巡遊。斗南ケ丘に立ち寄られる。これを記念し昭和18年7月、相携会が中心となって斗南ケ丘へ秩父宮両殿下御成記念碑を建立
1976(昭和51)年8月	むつ市最花地区共同墓地に斗南會津会が「斗南藩追悼之碑」を建立
1990(平成2)年3月	むつ市大平岸壁に斗南藩成立120周年および市制施行30周年を記念し「斗南藩士上陸之地」の記念碑を建立(除幕式6月2日)

松平　親保氏
会津松平家14代当主松平保久（もりひさ）氏の長男

ごあいさつ
次期当主へ 意識高く

昨年初めて、みやぎ会津会の会合に参加させていただいた。温かく迎え入れてもらい、とてもうれしかった。

大学の同級生が私の名字を見て、松平容保の子孫かどうかを聞いてきた。同級生の中には、自分より会津の歴史に詳しい人もいる。会津松平家の十五代目として、まだまだ会津を知らな過ぎるのではないかと感じることがある。今後さらに勉強していきたい。ぜひ、皆さんから貴重なお話を伺わせていただきたい。

今年は戊辰戦争開戦から百五十年という大きな節目の年に当たる。会津にゆかりのある人たちが会津に思いをはせるのはとても大切なことだ。これまで以上に会津を考える一年にしていきたい。

まつだいら　ちかもり　早稲田大政治経済学部1年。19歳。

室井　照平氏
会津若松市長

「義」の思いをつなぐ

戊辰戦争の激戦地の一角で生まれた。幼いころ、会津若松市の西軍墓地でセミを捕るなどして遊んだ記憶がある。薩摩や長州、土佐など西軍として戦った各藩士の墓が百五十基ほどある。会津が攻め込まれ、多くの人が亡くなったのを身近に感じて育った。

今年、会津若松市内では鶴ケ城プロジェクションマッピングや記念講演、企画展など多彩な記念事業を展開する。「『義』の想い。つなげ未来へ」をキャッチフレーズに掲げ、歴史や先人の生きざま、会津に息づく精神文化などを広く発信する。歴史は変えられない。だが、義の思いを未来につないでいくことはできるはずだ。

むろい　しょうへい　会津若松市出身。東北大卒。会津若松市議、県議を経て、2011（平成23）年から現職。市戊辰150周年記念事業実行委員会長。62歳。

新城猪之吉氏
末廣酒造社長

歩んだ道 誇り持って

会津藩校日新館の宗像精館長が昨年十一月に長州藩のあった山口県萩市で初めて講演する際に同行した。「仲直りはできないが、仲良くはできる」と現地の人たちに伝えた。

会津から国内外に誇れる先人が数多く輩出された。七十七銀行頭取や仙台商工会議所会頭を務め、鶴ケ城を後世に残そうと尽力した旧会津藩士の遠藤敬止もその一人。明治二十三年に鶴ケ城の払い下げが決まり、私財を投じて松平家に寄贈した。遠藤敬止顕彰会長を務めている。六月には墓碑のある仙台市の寺で法要を営む。

歴史に学ぶことは多い。会津が一つとなり、歩んだ道を認識して誇りを持つべきだ。

しんじょう　いのきち　会津若松市出身。慶応大卒。県酒造組合会長、会津若松観光ビューロー理事長。遠藤敬止顕彰会長として功績の伝承に力を注いでいる。67歳。

目時　紀朗氏
斗南會津会相談役

信念貫く姿を支えに

先人の苦労や功績が風化してしまうとの危機感から、四年をかけて斗南會津会は記念誌「先人斗南に生きる」を刊行した。大きな苦難を乗り越えた会津や斗南の人々の思い、信義を大切に力強く生きた先人の姿を記念誌などを通じて後世に伝えたい。

会津人は斗南で明日の暮らしに希望を持ち、廃藩置県後も結束して支え合った。くじけずに信念を貫いた姿は、多くの人の心の支えになるはずだ。

歴史は過去との対話であり、先人の生き方を学ぶ機会だ。戊辰戦争の開戦から百五十年を迎えた。何代にもわたって受け継がれてきた斗南士魂を考えていきたい。

めとき　のりお　青森県むつ市出身。弘前大卒。青森県内で小学校長、県教育事務所長などを歴任。母方の小島家は会津藩のご右筆（ゆうひつ）を務めた。78歳。

滝尻　善英氏
八戸中央高（青森県八戸市）教頭

先人の魂が示す姿勢

二〇一四（平成二十六）、二〇一五の両年に実施された「会津・斗南次世代交流事業」に参加した。

八戸市には娘子（じょうし）隊中野竹子の妹優子の墓がある。竹子は戊辰戦争で奮戦するも命を落とした。竹子は優子に介錯を頼み、優子は涙ながらに太刀を振るったと伝わる。最後は駆け付けた会津藩士の助けを借りて首を切り落としたとされている。優子は戊辰戦争後、新選組の元隊士と結婚し、水産業を営んだ。

置かれている環境の中で、いかに生き抜くか、敗れてもはい上がるという生き方を会津魂が示している。まさに何事にも挑戦するという次世代へのメッセージだと思う。

たきじり　よしひで　青森県八戸市出身。中央大卒。青森県文化財保護協会副会長、斗南藩歴史研究会副会長。中野優子の墓がある御前（みさき）神社の神職を務めている。60歳。

須佐　尚康氏
みやぎ会津会会長

精神文化を広く理解

昨年はJR只見線が全線開通する見通しが発表されるなど古里会津地方にとってうれしいニュースがあった。

良い知らせは今年も続いている。安倍晋三首相が通常国会の施政方針演説で元東京帝大総長の山川健次郎に触れた。会津藩白虎隊の一員だった山川は日本のために大きな努力をした人だ。会津の偉人が改めて全国に発信された。

私の父は明治三十八年の生まれ。「男は泣くな、会津の人間だろ」と幼い頃から会津魂を徹底的にたたき込まれた。今年は戊辰戦争の開戦から百五十年という節目に当たる。会津が誇る精神文化などを広く理解してもらえる年にしたい。

すさ　たかやす　金山町出身。日大工学部卒。東洋ワーク社長、仙台経済同友会副代表幹事、宮城県就労支援事業者機構会長、東北障がい者芸術支援機構理事長。70歳。

仙台市青葉区にある充国寺には遠藤敬止の墓と供養塔が立つ。遺徳をしのび、献花が絶えない

斗南藩145年再興記念事業として斗南會津会が発刊した記念誌「先人斗南に生きる」。目時氏が編集総括を務めた

青森県八戸市の御前神社にある中野優子の墓。果敢な人生を送った優子を弔おうと訪れる人の姿が目立つ

みやぎ会津会は全国の会津会関係者と交流を深めている。震災と原発事故後は本県復興を支援。2011年7月には「がんばろう会津！1日バスツアー」を実施した

会津の魂を未来へ継いでいくことを誓い、シンポジウムで掛け声を上げる出席者ら

福島民報社と東奥日報社
高校生の交流事業展開

福島民報社と青森県の東奥日報社は二〇一四（平成二十六）年、二〇一五年の二年間にわたり「会津・斗南次世代交流事業」を繰り広げた。

会津地方と青森県内の高校生が互いの地を訪問し、会津、斗南両藩の歴史や当時の人たちの思いや足跡などに理解を深めた。

二〇一四年は会津若松ザベリオ学園高の生徒四人が斗南藩ゆかりの青森県三戸町やむつ市を訪問した。翌年は三戸高の生徒四人が会津若松市などを訪れ、会津藩校日新館で講義を受けたほか、白虎隊士の墓も訪れて手を合わせた。

会津藩校日新館前で、絵付けした赤べこを手にする会津若松ザベリオ学園高と三戸高の生徒ら＝2015年8月

筒井（つつい）　悠巴（ゆうは）さん　19
（会津若松ザベリオ学園高卒、福島医大医学部1年）

古里の歴史学んだ

「斗南藩」という名前さえも知らず、何も分からない状態で交流事業に臨んだ。

会津藩の人たちが、環境の異なる斗南で苦労した話がとても印象に残った。交流事業の二年目は青森県の高校生を会津に迎えた。他県の高校生との会話を通して、それまで詳しく知らなかった会津の歴史を学べた。

現在は医療を学んでいる。医師となって古里の会津地方で、高齢者の心と体のケアを担いたい。その日のために努力していきたい。

川口（かわぐち）　成美（なるみ）さん　20
（三戸高卒、陸上自衛隊八戸駐屯地第9飛行隊）

心を正す道しるべ

交流事業を通じて、苦しい状況の中でも励まし合って生き抜いた会津人の強さを学んだ。服の裏にお経を書いて出陣し、古里を必死に守ろうとした姿など、授業では学べない先人の思いに触れた。

会津の歴史から感じたのは、人や物への感謝や思いやりなど、人として大切なことばかりだった。心を正す道しるべにしている。現在、航空機整備士としてヘリコプター整備などに当たっている。貴重な体験を糧に懸命に職務に当たりたい。

※ みやぎ会津会　宮城県内在住の会津地方出身者らを中心に組織している。会津の伝統や文化を広く語り継ぎ、次世代に伝えていこうと2008（平成20）年に設立された。会員は1月27日現在で223人。300人を目指して活動している。会津ゆかりの地を訪問しながら、全国各地の会津会と交流している。講演会や懇親会などを通して会員間の交流を深めている。

▷主催＝みやぎ会津会
▷協力＝斗南會津会、福島民報社、東奥日報社